

死者の民主主義

—生者・死者・未生者を包摂する大いなる共同体—



理事・拓殖大学政経学部教授 丹羽文生

民主主義とは、果たして生者たちだけのものなのだろうか。民主的な社会では、民衆が主権者として唯一の政治介入たる選挙において投票する権利を行使し、その多数意思によって国の行く末が決せられる。しかしながら、今日の平和と繁栄は決して現世の生者たちのみの努力によって築き上げられたものではない。幾世代にも亘る無数の死者たちによる営為の堆積の上に成り立っている。故に民主主義とは、本来、生者のみならず死者をも包摂した共同体の自己統治であると言える。

近年、民主主義は「民意」という言葉の下、しばしば即時性に支配されている。世論調査の数値、内閣・政党の短期的支持率、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）を通じて瞬時に拡散される断片の情報や感情的応酬…。このような瞬間風速が、恰も絶対的正義であるかのように扱われる場面は少なくない。しかし、その「現在」は、どれほど確かなものなのだろうか。

20世紀初頭のイギリスを代表する作家で保守主義思想家のチェスタトン、その著書『正統とは何か』において、「単にたまたま今生きて動いているというだけで、今の人間が投票権を独占するなどということは、生者の傲慢な寡頭政治以外の何物でもない。伝統はこれに屈服することを許さない。（中

略）われわれは死者を会議に招かねばならない」と主張する。そして伝統とは「選挙権の時間的拡大」であり、「われらが祖先に投票権を与えること」、即ち「死者の民主主義」とであると説く（チェスタトン著、福田恆存、安西徹雄訳『正統とは何か』（春秋社、1973年）。

私たち生者は、「仮の所有者」に過ぎない。社会も国も「歴史」という長い河の中で東の間を生きる私たちに一時的に託された預かり物なのである。同時に、「死者の民主主義」は未だ生まれざる未来の人々への責任とも不可分である。「現在」の生者は、自らのことだけを優先し過ぎる。だが、まだ声を持たぬ未生者も共同体の一員のはずである。民主主義とは選挙の度に「新しさ」や「変化」を競うものではない。先人たちが遺したものを吟味し、それを未来に手渡す責任を自覚する営みでなければならないのではないか。

日本において、その大いなる共同体を象徴的に体現してきた存在の1つが皇室である。皇室典範改正に向けた協議が大詰めを迎えている。単なる制度設計ではなく、祖先より受け継がれてきた連続性という価値を、いかに損なうことなく次代へ継承していくのか。まさに今、日本は「死者の民主主義」という問いに向き合うことを迫られている。